

ことにより、クラス全員が参加できる授業となった。授業中の質問も多くなった。

ウ 教員の感想や意見

以下、アンケート方式で各教員から記入してもらった記述部分の回答から一部を抜粋した。

<UDの視点を「意識」すること>

- ・今まで「これで伝わるだろう」と思っていた指示や説明では不十分だった。
- ・生徒一人一人の反応を見ながら進めなければならない現状があり、そのためには想像力が必要だと感じる。自分自身が想像力を高めていく努力をしたい。
- ・以前から心がけてきたことも多いが、改めて意識して取り組むことにより、自分の授業や生徒との接し方を見直すきっかけとなった。

<UDの視点を取り入れてみて>

- ・他の教師の様々な工夫が大変参考になり、自分の授業に活かすことができた。
- ・生徒一人一人が理解できるような授業に改善したことで、生徒が授業のときに生き生きしたり、わかったことを表現してくれたりする機会が増えた。このことにより、自分自身がもっと工夫しようという気持ちにつながっている。
- ・説明、板書、生徒同士の話し合いなど、工夫を重ねることで誰もが「これを学んだ」と思えるような内容の授業を目指して取り組んだことは、自分自身大きな成果であった。
- ・初めのうちは工夫して新しく教材をつくる手間を感じたが、その教材は繰り返し利用できるものであるため、その後の授業でもとても役立っている。また教室では視覚的効果をねらった掲示物の工夫をすることで、教室環境がよくなった。
- ・これをやれば「UD」の正解というものはないので、各自がそれぞれで考えながら授業をするようになったと思う。

以上、「UDの視点を取り入れた授業づくり」に取り組んだ教員は、概ねその効果について高い評価をしていることがわかる。ほとんどの教員がその必要性を認めており、特に、「日々の授業における生徒の実態を大切にする」視点を改めて意識できたことは、大きな成果となった。

また、高等学校において、これまでの事後研は、教科の特性により、該当する教科内で閉じられた中で行われることが多かった。今回は、初任者研修の授業研究に、「UDの視点」と「ワークショップ型の事後研」を取り入れたことで、教科の垣根が取り払われ、教員同士の協働性が十分に発揮される結果となった。今後も、各教科における継続的な取組みを通して、山辺高等学校における校内研究の活性化を進めていただきたい。

(5) キャリア教育の充実を目指したUDの授業づくり ～山形県立山添高等学校～

① 授業づくりの特色

山添高校では、平成23年度文部科学省委託を受け、特別支援教育総合推進事業「高等学校における発達障害のある生徒へのキャリア教育の充実」の研究に取り組んできた。平成20年度から、校内で特別な支援や配慮を必要とする生徒に対する支援の一つとして、少しずつ教室環境や授業のユニバーサルデザイン化を進めてきているが、この研究を機に、本校ならではの特別支援の在り方を探るとともに、より一層の学校教育の充実を目指している。

具体的には、「アカデミックスキル」と「ソーシャルスキル」の2本の柱での育成をねらい、生徒の実態に合わせて段階的な支援（一次～三次）を設定している。以下、「UDの7つの視点」を参考にした授業実践を交えながら、研究の取組みについて紹介する。

ア アカデミックスキルの育成

＊山添高校のアカデミックスキルについて

アカデミックスキルとは、学習するための基礎となる、基本的学習能力のことを指す。山添高校ではその能力の育成を図り、生徒が規律を守り集中して授業に取り組むことが「わかる、できる」につながることを目指していた。

(7) 一次支援（全体指導）

a 教室環境のユニバーサルデザイン化

校内共通して、教室の前面には、生徒の集中力を妨げないよう掲示物は制限して貼らないこととし、授業のマナーのみが掲示されていた。

また、教室の側面に連絡用のホワイトボードを設置し、時間割と日課表を掲示して、日程情報を一箇所に集約していた。時間割と日課表の色分けは、生徒のファイルの色ともリンクしていた。生徒が授業によってファイルを使い分けできる工夫がなされていた。

また、ロッカーの整理の仕方については、写真での見本を掲示しておくことによって、生徒の意識が高まり、どのロッカーも整然と教科書やファイル等が置かれていた。

月	火	水	木	金
1	数学Ⅱ	現代文	英語Ⅱ	数学Ⅱ
2	現代文	理科総合A	英語Ⅱ	現代文
3	英語Ⅱ	数学Ⅱ	英語Ⅱ	英語Ⅱ
4	英語Ⅱ	数学Ⅱ	英語Ⅱ	英語Ⅱ
5	英語Ⅱ	数学Ⅱ	英語Ⅱ	英語Ⅱ
6	英語Ⅱ	数学Ⅱ	英語Ⅱ	英語Ⅱ

図4-6-1

教科ごとに色分けした
時間割表



図4-6-2

ロッカーの整理の仕方
(写真見本の掲示)

b 授業のユニバーサルデザイン化

授業のUD化については、日頃の打合せや職員研修会において、全職員で共通理解を図りながら進めてきていた。年度初めの職員会議では、特別支援教育コーディネーターを中心に、「発達障がいのある生徒に対して有効な手立ては、すべての生徒に対して有効である」という統一した意識のもと、取組みや配慮点について、資料を準備して確認してきた。

例○指示は短く、2つまで、具体的に出す ○板書は大きく、色別で書く
 ○プリントは、授業中に綴じさせる ○時間割変更は、ホワイトボードへ記入
 ○テスト様式（文字のポイント、解答欄の位置） ○授業内容のプリント化
 ○否定的表現より望ましい姿（モデル）の提示

また、各自のUDの実践を文書化し、教員間で共有する取り組みも行っていた。研究授業では、「UD化への取り組み」シート（A4判1枚）を作成して、互いの授業を見合い、できるだけ感想や意見を交換できるように工夫していた。

c 学校設定教科「ベーシック」の実施

目標は、「学ぶことについて面白さ、楽しさ、有用性を理解させ、広く学習に対する意識の高揚を図る。」「義務教育段階での学習内容の確実な定着を図り、高等学校の学習へスムーズに移行させる。」などである。多分野にわたるテーマを設定した講義や、生徒自身の能力や進度に合わせた基礎・基本問題の演習などの授業を計画していた。

(4) 二次支援（個別の配慮）・三次支援（個別の支援）

UDの授業を一次支援としたとき、二次支援・三次支援はUDにはあたらないが、山添高校では、個別支援も含めた校内支援体制の構築を行っていた。二次支援では、教科担当者会での配慮を要する生徒の検討や情報共有、特別支援教育支援員の活用、三次支援では、個別の指導計画の作成、スクールカウンセラーなどの外部機関との連携を実施していた。

イ ソーシャルスキルの育成

ソーシャルスキルの育成では、社会生活に必要な能力を育てるための指導が行われていた。導入のきっかけは、生活の基本的なことから指導内容が必要であるという職員間の認識や、生徒同士の人間関係のトラブルが絶えないことなどの理由があった。そこから対処療法ではなく、未然防止を目指すソーシャルスキルの育成が始まっている。

(7) 一次支援（全体指導）

a 多様なボランティア活動

例○クリーンキャンペーン（清掃活動） ○高齢世帯への年賀状送付
 ○学童保育所への読み聞かせ活動 ○保育園への手作りおもちゃプレゼント
 ○高齢者世帯除雪作業 ○伝統芸能黒川能「王祇祭」除雪
 ○「水焰の能」会場設営補助 ○被災地支援活動 など

b 朝学習としてのソーシャルスキルトレーニング（以下、SSTと略する）

2学年において、月・火曜日の朝10分間、学級の実態や状況を見ながら実施している。

c フリースペースや図書館の活用

HR教室の隣の空き教室を開放し、授業以外で生徒たちが自由に使える空間を「居場所」

として提供している。

(4) 二次支援（個別の配慮）・三次支援（個別の支援）

アカデミックスキルの育成の二次支援や三次支援と同様の内容で取り組んでいる。

② 授業の実際

ア 1年生国語総合の授業 ～単元名 羅生門～

(7) 本時で取り入れた「UDの視点による手立て」

a 習熟度別クラス編成による授業（UDの視点Ⅳ「授業の構成」⑥より）

学年2クラスを習熟度別の2つに分けて授業を進めていた。参観したクラスでは、学び直しの学習内容を含めながら、生徒が意欲的に授業に取り組めるよう指導した。

b 集中力を高めたり気分を切り替えたりする活動と構成の工夫（UDの視点Ⅳ「授業の構成」⑦より）

1時間の授業を3つのユニットに分け、漢字練習（10分）、基礎力プリント（15分）、教科書（25分）の学習で構成した。取り組む内容に変化を持たせて学習活動にメリハリをつけ、集中力の持続を図った。

c 見てわかりやすく、ノートに取りやすい板書の工夫（UDの視点Ⅵ「板書、ノートやファイル」全般より）

後半の教科書の学習では、まず教科書のページ数を板書し、学習する箇所を捉えさせてノートに書かせるなど、後で復習しやすいノートになるように指導した。

板書は、大きな文字と短い文章で簡潔に書かれていた。色チョークを強調に使い、大事な点の説明を加えながら学習の理解を図った。小説の内容をイメージさせるために略画を描いた説明などもあった。



図4-6-3 国語総合の授業

d 個別の声かけや確認（UDの視点Ⅴ「教師の話し方、発問や指示」②より）

全体での発問や指示のほか、机間指導を通して一人一人を観察しながら意欲を引き出すなど、個に応じた声かけをしている様子が見られた。

イ 1年生学校設定教科「ベーシック」の授業 ～テーマ6 建築物に潜む様々な学問～

(7) 本時で取り入れた「UDの視点による手立て」

ティームティーチング（専門教科1名、他教科1名）で、義務教育段階の基礎・基本の計算問題について演習する授業だった。前時に講義を行い、本時への動機づけとしている。

本時は4枚の演習プリントに取り組ませた。最初の基本の演習プリントを解き終えた生徒は、A教員から解答を受け取り自己採点した。採点後はB教員に検印をもらい、次の発展演

習プリントに向かった。これを個々の進度に合わせて繰り返した。その間、AB教員は机間指導を行い、適宜丁寧に質問などに対応した。すべてが終了すると自己診断カルテに進度を記録させ、演習プリントやカルテをファイルに綴じさせた。

以上、授業の中から、下記のようなUDの視点による工夫や配慮が見られた。

- a 自学自習を基本とした演習の授業づくり
(UDの視点Ⅳ「授業の構成」全般より)
- b ティームティーチングによる個別の支援(UDの視点Ⅴ「教師の話し方、発問や指示」①②より)
- c 8つのテーマにそって作成された5教科の学び直しの演習プリント(UDの視点Ⅶ「教材・教具」③④より)
- d ポートフォリオファイルの活用(UDの視点Ⅵ「板書、ノートやファイル」⑤より)

授業形態、学習内容や教材、授業の進め方、役割分担などについて全校で共通理解に立ち、生徒が学習に取り組みやすく、達成感を実感できるような授業づくりを進めていた。



図4-6-4 「ベーシック」の授業

ウ 2年生の朝の会 ～SSTの授業～

(7) 本時で取り入れた「UDの視点による手立て」

朝の始業前の約10分間、生活で必要なソーシャルスキルについて学習した。スキル指導のみに特化せず心を育てる要素を盛り込んだ。本時では「3種類の話し方」をテーマとし、まず前回のSSTの内容を振り返った。3種類の話し方をアニメキャラクターを例にしてわかりやすく説明したり、身の回りの事例を挙げて場面を想像させたりした。簡単なワークシートを用意し、適切な話し方について考えさせて書かせた。



図4-6-5 SSTの授業

以上、授業の中から、下記のようなUDの視点による工夫や配慮が見られた。

- a コミュニケーションの仕方やマナー(UDの視点Ⅲ「関係づくり」③より)
- b ワークシートの使用(UDの視点Ⅶ「教材・教具」③より)

③ UDの視点を取り入れた授業実践の成果

ア 授業研究の進め方について

校内でUDの研究授業を1週間設定し、各教員が工夫した授業づくりに取り組み、また、互いの授業を気軽に見合うことができた。「UD化への取組みシート」には、「UDの7つの視点」を参考にした手立てが明記されており、異教科の教員同士であっても、授業を見る視点をしっかりと共有化することに役立った。また、高等学校において、異教科の授業を参観すること自体が、校内研究の活性化にもつながる取組みになっていたと捉えられる。

イ 生徒に見られた変容

＜アカデミックスキルの育成に関する校内アンケート調査から＞

- ・「わかりやすい授業になった」、「授業に集中できる」、「授業規律を守ることができている」、「ベーシックをするにつれて楽しさを感じることができた」、「ベーシックをやっていると、教科の授業が少し楽になった」などの生徒の感想が得られた。

＜ソーシャルスキルの育成に関する校内アンケート調査から＞

- ・「ボランティアは、やんなきゃいけないことなので続けてもらいたい。」（帰属意識や所属意識）、「少しは私も役に立つことができた。」（有用感）など生徒の感想が得られた。
- ・朝学習（SST）について、ためになるものが「あった」、「まあまあだった」という回答が88%だった。その内容には、「人づき合いのこと」「社会でのマナー」「学校でのルール」、「話し方」などの回答が見られた。また、「山添高校での生活で自慢できることはあるか」という問いに対して、中学校3年間と比べると自慢できることができたという回答した生徒数が増えた。

＜その他、生徒の様子から（以下、教員からの聞き取り）＞

- ・遅刻、早退、欠席が減り、落ち着いて授業を受けることができるようになったり、心身の不調を訴える生徒が激減したりした。この取り組みが関係しているように思う。
- ・校舎内の破損がなくなり、清掃や整理整頓がスムーズにできるようになった。学校生活での変化が様々なところで見られるようになった。
- ・人間関係のトラブルが少なくなり、職場体験学習などで良好な評価を得ている。

ウ 教員の感想や意見

- ・発達障がいのある生徒に、「こうすればできそうだな」という見通しを持たせ、できる自分に気づかせていくため、今後も、一次支援において自己肯定感の醸成を大事にしたい。
- ・生徒へかかわる際の意識が変わったと思う。一人一人に合った、今必要なことを支援していかうという生徒理解の立場に立てるようになった。
- ・卒業時の就労を目的とする必要はなく、生きていく土台をつくることを最優先と考えてよいのではないと思う。土台は、「このやり方ならできる」、「この状況ならこの仕事ができる」という理解と気持ちを持つことである。長い目で見た勤労観を持たせたい。
- ・小規模校での多様な活動が、全生徒に行き渡る程度の役割を生み、キャリア教育にもつながっていると感じる。

以上、UDの実践がもたらした生徒や教師の意識の変容には、目を見張るものがあった。高等学校としてUDの授業づくりの取り組みが少ない中、全教職員が共通理解に立ち、教育活動全般に渡って取り組んできた実践はとても貴重である。12月に行われた研究発表会では、山添高校の先生方のすべての生徒に対するあたたかい眼差しが感じられ、今後UDの授業づくりを推進するにあたり、たくさんの示唆をいただいた。今後、より一層校内研究を深め、発表にあった「山添高校での方法なら社会でも通用する」を合い言葉にした、生徒一人一人に成功方法の自覚と習慣化を目指す取り組みを続けていきたい。

(6) UDの視点で捉えた特別支援学校の授業づくり～山形県立鶴岡高等養護学校～

① 授業づくりの特色

鶴岡高等養護学校は、知的発達に遅滞があり、一般就労を目指す生徒に、後期中等教育を行い、一人一人の障がいや能力・特性に応じた教育を通して、社会自立できる人間の育成を目的とする特別支援学校である。

知的障がい対象の特別支援学校においては、生活に根差した教育を重視する考えの下、様々な授業づくりの研究が行われてきた歴史と伝統がある。一人一人の学びを保障するために、これまで蓄積されてきた指導の工夫や配慮を活かした授業づくりがなされている。その中には、通常の学級におけるUDの視点を取り入れた授業づくりに共通する部分も多い。ここでは、それらのうち、いくつかを紹介したい。

② 授業の実際

ア 2年生家庭の授業 ～单元名 一品料理を作ろう～

身近な食材を使い、一人一人がレシピを見ながら一品料理づくりに挑戦する授業であった。身支度、道具の準備から、調理後の片付けまでを学習活動とし、将来の実生活に活かされる内容である。調理に関しては、包丁を使って野菜の皮をむいて切ることや、コンロで肉や野菜を茹でたり煮たりすることを学習した。

本時の「ビーフシチューを作ろう」は、5品目の調理の授業であり、共通する食材の調理に慣れ、手順もわかってきている段階であった。

(7) UDの視点で捉えた本時の手立て

a 取り組みやすい教室環境（UDの視点Ⅰ「教室環境」①③と関連）

調理室は、壁面に掲示物がなくすっきりしていた。そのため前面の黒板に掲示された「工程」、「野菜の切り方」、「道具の洗い方の手順・留意点」などの情報が際立って見えた。生徒が困ったときにいつでも確認できる手がかりとなっていた。

準備した材料や道具の配置について、ルールが決められており、全員が同じ配置で準備することができていた。調理しやすい“場づくり”が工夫されていたことで、生徒たちは戸惑うことなく準備や調理に取り組むことができた。



図4-7-1

余計な刺激を取り除いた壁面



図4-7-2

配置が決められている調理台

b 学習の流れの見通しを持たせる工夫（UDの視点Ⅳ「授業の構成」①と関連）

導入時にレシピが配られた。材料や道具、調理の手順などの必要な情報が視覚的に提示された。この時点で、ビーフシチュー作りについて、ある程度イメージを持たせた。イラストもあり、理解しやすく配慮されていた。

調理の前に、全員でレシピを見ながら確認が行われた。気をつけるポイントには、赤いペンで線を引くように指示があった。その後、机間指導により丁寧な指導も行われた。

本時の学習が明確になり、期待感を持ちながら以後の身支度や準備の活動に取り組むことができた。

レシピはクリアファイルに入れ、使いやすいように工夫された。調理台の脇に洗濯ばさみではさんで下げられるようになっており、いつでも見ることができるようにした。

生徒たちはレシピを見て確認しながら調理を進めていた。レシピで、自分で考え行動する主体的な活動を促した。



図 4-7-3 レシピの確認

c 調理方法を理解させる工夫（UDの視点Ⅳ「授業の構成」④と関連）

野菜を切る際の大きさや形については、じゃがいもやたまねぎなどの食材を実際に見せながら確認が行われた。また、シチューの作り方について、指導者が一通りやって見せた。

生徒たちは、レシピで確認しながら、教師の提示や示範を真剣に見ていた。言葉のみの説明ではなく、実物を提示することや実際にやってみせることは非常にわかりやすく、調理のイメージを持ちやすかったと思われる。調理の開始を指示されると、生徒たちはすぐに取りかかることができた。

ビーフシチュー

○材料 肉 水 300 ml じゃがいも にんじん たまねぎ シチューウ サラダオイル	○道具 なべ さいばし、木べら ざる ボール おたま 包丁
---	---

○作り方

- 1 野菜を水で洗い、水を切ってざるに上げる。
- 2 野菜を切る。
・じゃがいもは皮をむいて1cm幅のいちよう切りにし水につける。
・にんじんも皮をむいてうすいいちよう切りにする。
・たまねぎはうす切りにする。
- 3 なべを中火にかけ、油を入れ、たまねぎを炒める。
- 4 肉を炒め、色が変わったら、じゃがいもとにんじんを入れる。
- 5 じゃがいもが柔らかくなるまで煮る。
- 6 火を止め、シチューウを入れる。
- 7 また火をつけ、かき回し
ルウがとけたら火を止める。

図 4-7-4 授業で用いたレシピ



図 4-7-5
食材を提示しての確認



図 4-7-6
示範による説明

イ 3年生（Bグループ）数学の授業 ～単元名 表とグラフ～

生徒の実態に大きな差があることから、能力別クラスでの授業が実施されていた。本単元は、Bグループ5名の生徒の実態から、小学校学習指導要領（算数編）に準じて考えられた内容であった。生徒たちが取り組んだゴミ拾い活動を取り上げ、ゴミの数や種類を分類・整理し、棒グラフに書き表したり、数量関係を読み取ったりする指導計画となっていた。

本時は、自分が作ったゴミの分類表と棒グラフからわかったことを発表する学習であった。ゴミ拾いの話題になると、表情が和み自発的な発言が多くなった。全員で取り組んだ活動であり、指導者や友だちとかかわりを持ちながら学習することができた。